

| | |
|--------------|---|
| Title | カムチャッカの高田屋嘉兵衛 |
| Author(s) | 生田, 美智子 |
| Citation | 言語文化研究. 2010, 36, p. 201-221 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/8653 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

カムチャッカの高田屋嘉兵衛

生 田 美 智 子

В начале XIX в. одно за другим произошли несколько событий, которые следует охарактеризовать как неудачи в русско-японских отношениях: отказ посольству Н.П.Резанова в установлении торговли, нападение Н.А.Хвостова и Г.И.Давыдова на северные территории Японии, пленение В.М.Головнина. Чтобы освободить капитана Головнина из японского плена, его помощник и друг П. И.Рикорд захватил в плен Такадая Кахэй и привез его на Камчатку. Кахэй сумел использовать свое пребывание у русских как шанс урегулировать русско-японские отношения и предотвратить войну. В чем же секрет успеха дипломатии Кахэй, который не знал русского языка и, когда его захватили, находился почти что в положении потерпевшего кораблекрушение? Статьи одного из журналов того времени и карта Петропавловского порта 1819-1820 гг. дают представление об атмосфере города и показывают, что у Кахэя были помощники.

Анализ этих материалов позволяет понять, как через письменный язык, ритуалы и символы Кахэй осуществлял межкультурную коммуникацию, и как доверие к нему со стороны русских позволило ему составить правильную стратегию для урегулирования русско-японских отношений.

キーワード：コトバ，儀礼・象徴，対等性

はじめに

ロシアのカムチャッカにある世界遺産ナルイチェヴォ自然公園には高田屋嘉兵衛の名前を冠した峰があり，観光名所のひとつになっている。ロシアの地名に日本人名がつくのは異例のことと言っている¹⁾。

周知のように，高田屋嘉兵衛は江戸後期の廻船業者として巨万の富を築いた豪商であり，私財を投じて函館を開拓し，淡路島の整備事業を行った傑物として有名である。その彼が，日本だけでなくロシアでも顕彰されるのは，日露交流に前人未到の大きな足跡を残したからである。すなわち，当時日本に捕らえられていたゴロヴニン（ディアナ号の艦長）以下総勢8人の乗組員の解放にリコルド（副艦長）と共に尽力し，日露間の紛争²⁾を未然に防

1) Меньшиков В.И. Нальчево. Имя на карте. Петропавловск Камчатский. 2008. С.32.

2) 日露間に戦争の可能性があったことは，たとえば，1812年4月18日付のシベリア総督の内務大臣あての秘密文書から分かる（РГИА，Ф.18. Оп. 5. Д. 1202. Л. 10）

いだ功績が顕彰されたのである。

近年、近世後期日本の対外関係の研究では、藤田覚『近世後期政治史と対外関係』（東京大学出版会、2005年）に見られるように、日本の対外政策を変化させた転機をロシアの対日接近に求める論考が多くなっている³⁾。日本が対露政策の策定を迫られるなかで、無自覚な鎖国から意識的鎖国へという流れと、その対極として開国論という流れができたとする見解である。その際の「ロシアン・インパクト」としては、ラクスマン来航、レザノフ来航、フヴォストフとダヴィドフによる蝦夷地襲撃事件、ゴロヴニン捕縛事件、高田屋嘉兵衛拿捕事件、プチャーチン来航が指摘できるだろう。

高田屋嘉兵衛に関する著作は多い。そこには、日露関係における嘉兵衛の貢献も必ずとりあげられている。嘉兵衛はリコルドによりカムチャッカに拉致されるという逆境を千載一遇のチャンスに変え、ロシアと日本の間をとりもつ体当たり外交を展開し、日露間の戦争を回避しただけでなく、日露の間に相互信頼関係を築いた。ロシア語を知らなかった嘉兵衛がそこまでの交渉をなしとげることができたのはなぜか。従来の研究では、ジェスチャーでコミュニケーションをとったとか、リコルドとの間に2人だけの「言語」をつくったと説明し、それ以上にこの謎に踏み込むことはなかった。

拙稿では、前述の研究動向をふまえたうえで、高田屋嘉兵衛外交の特徴を手掛かりに彼の外交の謎に光をあて、日露関係の未解明の部分を明らかにしようと思う。他の江戸期の日露外交交渉、すなわち、ラクスマン使節、レザノフ使節、プチャーチン使節と比べた時の高田屋嘉兵衛外交の特徴は、コトバのハードルの低さ、儀礼・象徴の重視、対等性の追求にある⁴⁾。しかし、公的な外交文書では彼は商人であったため、客体の扱いで、彼が主体的にどのような行動をしたのか必ずしも十分に書き込まれているとは言えない。公的な外交文書だけで嘉兵衛外交の謎は解明できない。ロシアでの嘉兵衛をとりまく人間関係や権力関係が再現されなければならない。日露の対立に権力側はいかに対応したのか。嘉兵衛の情報はどうな人間関係の中で集められ、それをどのように政策に展開したのか。いかにして信頼と共感を勝ち得ていったのか。有名なリコルドやゴロヴニンの手記以外に、リコルドの日記⁵⁾、地図や雑誌記事など当時のロシア側の文献を用いることで、従来は知られていない側面に注目してみようと思う。こうして得られた結果は、今日の日露関係にとっても教訓となるう。

紙数の関係で、本稿では嘉兵衛の外交活動のうちカムチャッカにおけるものに言及するにとどめる。なお日付は特に断らない限り露暦を用いる。西暦に直すには、12日を加えればいい。

3) 三谷博『ペリー来航』吉川弘文館、2003年、木崎良平『光太夫とラクスマン—幕末日露交渉史の一側面—』刀水書房、1992年、同『仙台漂流民とレザノフ—幕末日露交渉史の一側面No.2—』刀水書房、1997年、松本英治「19世紀はじめの日露関係と長崎オランダ商館」寺山恭輔編『東北アジア研究センターシンポジウム 開国以前の日露関係』、東北大学東北アジア研究センター、2006年など。

4) ラクスマン、レザノフ、プチャーチンの三使節の比較に関しては拙著『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史—描かれた相互イメージ・表象—』（ミネルヴァ書房、2008年）を参照されたい。

5) См.: Миницкий В. Адмирал Петр Иванович Рикорд и его современники. Ч. 1. СПб. 1856.

1. 高田屋嘉兵衛拿捕事件

高田屋嘉兵衛事件の種がまかれたのは1793年にさかのぼる。この年、幕府は通商関係樹立を要求したラクスマン使節に「国法書」を与えて、外国との通信・通商の限定に関する国法を説いてこれを拒絶した。しかし、漂流民を送還してきたロシアに礼を失しないよう「信牌」を渡すという玉虫色の外交を展開した。国法書では峻拒しながら、信牌を与え、外交儀礼面でも歓待したので、パーセプションギャップにより、ロシアは信牌（一回限りの長崎寄港許可書）を通商許可書と受け取る⁶⁾。

二度目の使節レザノフが信牌を携えて来航したのは1804年のことであった。ところが、幕府は半年もレザノフを「干魚の倉庫」⁷⁾に宿泊させたあげく、信牌をとりあげ、ゼロ回答をして使節を追い返した。リコルドは「日本の接待ぶり狗猫同前」であった⁸⁾と嘉兵衛に言っているが、これが大方のロシア人の受け止め方であった。レザノフは高圧的手段に訴えて通商関係樹立を迫ろうとした。レザノフは部下の海軍将校で露米会社社員のフヴォストフとダヴィドフに、樺太や択捉島などの日本人部落の襲撃を命じた。レザノフ自身は命令を出したものの逡巡し、命令を二転三転させた挙句、ペテルブルグへ上る途中クラスノヤルスクで病没してしまう。結局フヴォストフは1806年10月樺太島南部アニワ湾のオフイトマリヤクシュコタンにある日本人居留地を襲撃し日本人を捕虜にし、略奪放火し、カムチャッカへ引きあげた。1807年に再度来日し、エトロフ島や利尻島の日本人居留地を襲撃して略奪と放火を繰り返した。10人の樺太番人・エトロフ番人のうち8人を解放し、五郎次と左兵衛の2人をオホーツクへ連行した。幕府は態度を硬化させ、12月「魯西亜船打払令」を出し、日露間に極度の緊張が高まった。

1811年、ロシアの軍艦が国後沖に姿を現した。南千島列島測量のために来航したディアナ号であった。艦長ゴロヴニン以下総勢8人の乗組員は薪水を手に入れる交渉のため国後島に上陸し、日本側に捕縛されたのであった。この捕縛はロシア側からすれば国際法に反する不法行為であったが、日本側からすれば、フヴォストフ事件への対応策である「魯西亜船打払令」に従った行為であった。ディアナ号から望遠鏡で一部始終を見ていたリコルドは、170発の実弾を発射したが、武力でゴロヴニンを奪い返すのは困難と判断し、今後の対策を検討するために、いったんオホーツクへ引き返した。

リコルドはオホーツクに到着すると、オホーツク港長官ミツキーにゴロヴニン捕縛事件のことを報告した。ミツキーにとり、ゴロヴニンは英国艦で一緒だった時からの親友であった。彼はゴロヴニン救出に積極的に動き、輸送船ゾチクをリコルドのために準備した。一方、リコルドはゴロヴニン救出のため日本への出兵派遣を海軍大臣に要請すべくペテルブルグに上京しようとイルクーツクへ向かった。イルクーツクはシベリア総督府の所在地であった。総督が不在だったので、イルクーツクの民政長官トレスキンにペテルブル

6) 生田美智子、前掲書、89-92頁。

7) ドゥーフ著・永積洋子訳『ドゥーフ日本回想録』雄松堂出版、2003年、76頁。

8) 『高田屋嘉兵衛遭厄日記』大阪府立図書館蔵。ノンブルはない。翻刻は寡聞にして知らないが、以下の現代語訳がある。『高田屋嘉兵衛遭厄日記』高田屋嘉兵衛翁顕彰会、2003年。

グへ行く国内パスポートを申請した。トレスキンはペテルブルグに急使を送り許可の可否を打診したが、「皇帝の裁可」はおりなかった。西欧ではすでにナポレオンの軍隊がヨーロッパ全土を支配しており、東側に兵力を振り向けることはできない状況だったのである⁹⁾。リコルドは日本遠征隊が派遣されることを聞いていたので、トレスキンに自分が行くことを願いでた。南千島での測量続行が目的だが、その機会にゴロヴニンたちの安否を確かめようとしたのだ。トレスキンは権限内での協力は惜しまず、リコルドに許可を与えた¹⁰⁾。

1812年7月、リコルドはゴロヴニン救出の手段として良左衛門こと、中川五郎次¹¹⁾と6人の漂流民を連れて日本に来航した。彼らをゴロヴニンたちと捕虜交換するつもりであった。リコルドは漂流民を上陸させ交渉の手筈を整えようとするが、うまくいかなかった。結局、漂流民2人と五郎次は帰艦せず、リコルドは日本との連絡手段を失う。

9月、リコルドは附近を通りかかった観世丸を拿捕する。乗組員は60人ほどで、船長は高田屋嘉兵衛であった。リコルドに捕らえられた嘉兵衛は事件にまきこまれたといえる。だが、晴天の霹靂ではなく、日露間が極度の緊張状態にあり、戦争に突入する危険性があることは、熟知していたであろう。嘉兵衛の肩書きは「エトロフ嶋請負人」であった。島を預かる者として絶えず日露関係の悪化を憂慮し、解決を真剣に望んでいたに違いない。嘉兵衛をとらえたリコルドはカムチャッカへの同行を求めた。嘉兵衛は「わかりました。覚悟はできています」¹²⁾と、毅然とした態度で未知なる国へ行くことを承諾した。嘉兵衛は自分一人がカムチャッカへ行くことを主張したが、ほぼ同数の捕虜を交換することで事件を解決しようと考えていたリコルドの要求で、結局6人がロシアへ行くことになった。この時点でリコルドがカムチャッカから連れてきた4人の漂流民は解放された。

嘉兵衛は後日リコルドにこの時の気持ちをこう言ったという。「わたし位の肩書きの人間になると、お前さんが連行すると言ったようには、捕虜となって外国へ行くわけにはいかないのだ。カムチャッカへは自分から行ったのだ」¹³⁾。

捕虜としてではなく、あくまで自分からすすんでロシアにわたる。「日本支配」「エトロフ嶋請負人」¹⁴⁾としての嘉兵衛の強い思いが感じられる。周知のように、近藤重蔵と嘉兵衛によりエトロフ島は開拓された。嘉兵衛の経営よろしきを得て、この頃のエトロフ島

9) しかし、政府が無為無策だったわけではなく、平川新が指摘したように、1812年6月には外務大臣サルティコフを通じて在露アメリカ大使にゴロヴニン救出への援助を要請している。Россия и США: становление отношений 1765-1815. М., 1980. С. 529. 平川新「漂流民とロシア—日露の出合いと交流—」『東北アジアアラカルト 日本とロシア—その歴史をふりかえる』(東北大学東北アジア研究センター, 2003年) 参照。

10) Миницкий В. Указ. соч. С. 130-134.

11) 6年前にフォボストフが拉致してきた日本人である五郎次はロシア語がしゃべれるので、リコルドは彼を通じて日本に働きかけることにしたのだ。

12) Рикорд П.И. Записки капитана флота Рикорда о плавании его к японским берегам в 1812 и 1815 годах, и о сношениях с японцами. СПб. 1816. С.38. 翻訳に際しては以下の訳文を参照した。リコルド著・井上満訳「艦長リコルドの手記」(ゴロヴニン著・井上満訳『日本幽囚記』下, 岩波書店, 1946年)。P.I.リコルド著・斉藤智之訳『対日折衝記』2006年。

13) Там же. С. 62.

14) 『樺太カムチャッカのことなど(高田屋嘉兵衛の報告書)』, 1814年, 徳島文理大学図書館蔵。(現物閲覧は不許可で, 徳島県立文書館が写真印刷して閲覧に供しているのを見た)。

には「会所一カ所、通詞二人、番子屋九カ所、番人二〇人、板蔵七カ所、稼方三〇人、萱蔵二十一カ所、船頭一人、油絞竈五三口、水主九人、鯨船一艘、大囀合船（漁船）二艘、夷船六三艘がそなわり、アイヌの人口もやがて一〇〇〇人を超えたのであった」¹⁵⁾。これだけの所帯を預かる責任者として、嘉兵衛は一介の民間人でありながら、日露の緊張関係を何とか解決しようと考えていたように思われる。

嘉兵衛は出発前に松前奉行支配調役に宛てた手紙と2人の弟に宛てた手紙を各一通したためた。ここでは後者を見てみよう。「残念には候らえども、又壺つ勘弁致候事有、我は御上の段々御れんみに相なる候事故、なにとそ異国へ参り、よき通詞に出合掛合致候は、夷地もおだやかに相成可申事も有之、いつ迄所々おさわかしか候而も我国のためあしく候故、何分捕らわれと相成候ら得ば命おしき事之無、大丈夫にて掛合見可申積り（中略）御上の御趣意少々は存おり候故、掛合も致し候事よろしく候、併し日本ため悪しく事は致し不申、只天下のためを存おり候」¹⁶⁾

嘉兵衛は、法を犯して異国に赴く自らの立場を明らかにしたうえで、自分は公儀の趣意をわきまえているので通詞を見つけてロシアに掛け合い、日露の紛争状態に終止符を打つとの覚悟を披歴している。彼がまず目指したのはコトバの壁を超えることであった。

2. カムチャッカの中の日本

カムチャッカはユーラシア大陸の北東にある半島で、関西空港から飛行時間にして4時間ほどの所にある。隣国なので、漂流が頻発した江戸時代、多くの日本人が漂着した。どれほどの日本人が流れついていたのであろうか。記録に残っているもののみ列挙してみよう。

1697年には伝兵衛（元禄大坂漂流民）がコサック隊長アトラソフにカムチャッカ西岸イチャ川のほとりで発見された。1702年にピョートル大帝はモスクワ郊外のプレオブラジェンスコエ村で彼を引見し、日本に関する情報を収集し、日本語を貴族の子弟に教えるよう命じた。こうして彼はロシアで最初の日本語教師でロシア正教徒となった。

1710年にはサニマ（宝永南部漂流民）がカムチャッカ南部のアワチャ湾北方に漂着した。1713年のコズイレフスキーの第2回千島探検に水先案内・通訳として同行し、後にペテルブルグに送られ、伝兵衛の助手になり、日本語を教えたといわれている。

1729年にはカムチャッカ最南端のロパトカ岬とアワチャ湾の間に日本船が漂着、17人の乗組員の内、ソウザとゴンザ（薩摩若潮丸漂流民）2人を除いた全員がコサック隊長シュティンニコフに殺害された。ソウザとゴンザはペテルブルグに連れてこられ、1734年アンナ女帝に拝謁し、洗礼を受けて、ゴンザはコジマ・シュリツ、ソウザはデミヤン・ポモルツェフとなった。1736年、ロシア科学アカデミー付属日本語学校が創設され、二人は日本語教師になり、4年間で6冊の日本語教材を作成した。

1787年8月には大黒屋光太夫たち（伊勢神昌丸漂流民）が自前の船でカムチャッカ政庁

15) 須藤隆仙『高田屋嘉兵衛』図書刊行会、1989年、75頁。

16) 「高田屋嘉兵衛書状」（嘉蔵・金兵衛宛）、1812年、神戸市立博物館蔵。

のあるニジニ・カムチャッカへ辿り着いた。彼らは1782年12月に遭難、アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着し、島での生活のあと、自分たちで船を建造し、カムチャッカに渡ったのであった。1788年、カムチャッカを出て、イルクーツクへ行き、さらに、1791年には大黒屋光太夫が単身ペテルブルグへ上京し、エカテリーナ女帝に帰国を嘆願した。1792年、第一回遣日使節ラクスマンに護送されて帰国を果たした。伊勢漂流民の帰還は、漂流民引き渡しを掲げ通商交渉の糸口をつかもうとするロシアの対日交渉パターン先の先駆けとなった。

1804年7月、第二回遣日使節レザノフが仙台漂流民¹⁷⁾を伴って通商関係樹立要求を掲げ日本に行く途中ナジェジダ号をペトロパヴロフスクに入港させた。船には日本に送還される漂流民のほかにロシアに帰化した善六（キセリョフ）も乗船しており、帰国組と残留者との不和が頂点に達したため、対日交渉に支障をきたすことを恐れたレザノフが善六に下船を命じたのであった。

1805年5月、対日交渉に失敗したレザノフがカムチャッカに戻ってきた。当時、滞留中の南部慶祥丸の漂流民は、日露通商樹立のあかつきには帰国が約束されていた。しかし、日本側から拒絶にあつて、状況は激変し、「子供に至るまでヤッポンホウダ又はヤッポンソバカ杯と申候、是は彼国の詞にて、日本は悪し、日本之犬と悪口致し候」¹⁸⁾という事態に至ったという。いたたまれなくなった彼らはペトロパヴロフスクを脱出して千島列島沿いに自力で日本帰国を果たした。千島列島縦断自力帰還は日露関係悪化の産物であった。

1806年11月には樺太を襲撃したフヴォストフが4人の日本人樺太番人をペトロパヴロフスクに連行した。1807年、フヴォストフはダヴィドフとともにエトロフに姿を現し、略奪放火を繰り返した。この時拉致された左兵衛は二度目の逃亡の時に死亡したが、五郎次は、6年後にリコルドにより日本とのパイプ役として日本に連行された際に帰国した。

1811年には紀州半島沖で嵐に遭遇した摂津（兵庫）歎喜丸がカムチャッカ半島に漂着したが、16名のうち、9名が死亡した。1812年、ゴロヴニン釈放のための交換要員として、彼らは国後に護送されたが、安芸（広島）出身の久蔵は凍傷にかかり足を切断したため、残留することになった。久蔵は1813年、リコルドの船で（三回目の日本遠征）箱館へ送り返され、ガラスの中に入れた種痘苗と種痘術を持ちかえるが、治療法が受け入れられず、宝の持ち腐れになった。

このように、多くの漂流民や抑留者がカムチャッカでの生活を体験していた。カムチャッカに残る日本はヒトだけではなく、地元の郷土博物館には以下のようなモノとカネが展示されている。たとえば、モノには、四爪碇がある。周知のように、日本の碇は先が四つに分かれている。ロシアの碇は戸田村にある造船資料館に展示されているディアナ号の碇を見ればわかるように、碇の先は二つに分かれている。カネには寛永通宝がある。穴があ

17) 仙台漂流民は1794年、アリューシャン列島の無人島に漂着し、1795年6月28日に露米会社の船でオホーツクに送られた。そこで三班にわけられイルクーツクに到着したが、日本への帰還をめぐって、帰国組と残留組との感情的対立が生じていた。

18) 『通航一覽』第8巻、国書刊行会、1913年、197頁。

いているので、アクセサリーとされていたらしいが、まごうかたなき日本文字で寛永通宝と彫ってある。

以上のように、カムチャッカに残るヒト、モノ、カネは、カムチャッカが長年にわたり日露交流の重要なインターフェイスであったことを物語っている。日露が千島列島を南と北から植民していくにつれ、日露交流の様相は漂流から、拉致や捕虜に変わってきたことが読みとれる。

3. 19世紀初頭のペトロパヴロフスク港

嘉兵衛が連行されたペトロパヴロフスク港とはどのような町であったのであろう。17世紀末アトラソフ率いるコサックがカムチャッカを制圧した。それから約40年後の18世紀初頭、ロシアを強大な海洋国家に改造しようというピョートル大帝の大改革の波は、遠いカムチャッカの地にまで及んだ。第一回カムチャッカ探検隊（1725-30年）と第二回カムチャッカ探検隊（1733-1743年）が派遣され、ベーリング海峡やアリューシャン列島などが発見された。探検隊の隊員エラギンは、荒波を避けることができ、周囲の多くの山から淡水の補給できる入江を選びアワチャ湾で港の建設を開始した。1740年10月にベーリング率いる聖ピョートル（ペテロ）号と、チリコフ率いる聖パヴェル（パウロ）号の船舶がアワチャ湾に到着した。港は2人の聖者の名前をとってペトロパヴロフスク（ペテロとパウロ）港と名付けられ、この日が開基の日とされた¹⁹⁾。太平洋に面し、水深の深い良港²⁰⁾であるペトロパヴロフスクは、ロシア帝国のユーラシア大陸における「版図拡張」の最後を飾ると同時に、アメリカ大陸と日本進出への基地となった²¹⁾。当時「ルスカヤ・アメリカ（ロシアのアメリカ）」と呼ばれたアラスカ、アリューシャン列島、北アメリカ北西岸は、ロシアの植民地であった。1799年にはこの地域の植民地経営を目的に露米会社が設立され、ペトロパヴロフスク港は航海基地となり、ルスカヤ・アメリカから海路運ばれて来た毛皮はここからはシベリアを横断して陸路イルクーツクまで運ばれた。太平洋に面したロシア東端のペトロパヴロフスク港は、ロシア帝国の軍事・交易拠点となった。

嘉兵衛が滞在した1812-1813年当時のペトロパヴロフスク港であるが、当時の地図はないが、「1819-1820年の地図」はペテルブルグの海軍文書館と科学アカデミー図書館に今も保存されている。海軍文書館蔵の地図は『1740-1990年のペトロパヴロフスク・カムチャツキー』²²⁾という文書集を作成する過程でボリス・ポレヴォイ教授とタチヤナ・セルゲーエヴナ海軍文書館上級研究員により発見された。文書集は1994年に刊行されたが、地図は1997年の『歴史地理地図 17-19世紀のカムチャッカ』ではじめて公刊された。

19) Сгибнев А.С. Исторический очерк главнейших событий в камчатке с 1650-1856 гг.с.5-102// Вопросы истории Камчатки. Вып. 1. Петропавловск-Камчатский. 2008.

20) Крашенинников С.П. Описание земли Камчатки в двух томах. СПб. 1755. Т. 1. С.36-37.

21) 当時ロシア帝国の前に提起された日本とアメリカへ進出するという二つの課題については、1730年におこなわれたベーリングの提案に表現されている。オークニ著・原子林二郎訳『カムチャッカの歴史—カムチャッカ植民政策史—』大阪屋敷書店、1943年、27頁。

22) 1924年にペトロパヴロフスク・カムチャツキーと改称された。

2009年9月、筆者がペテルブルグの科学アカデミー図書館で調査した『1819-1820年のイルクーツク県地図』は、海軍文書館蔵の地図の原画であると思われる。この地図が1988年ソ連の歴史学者ボリス・ポレヴォイ教授により発見されたことは日本の新聞²³⁾でも報じられたが、まだ刊行されていない。オリジナルを見てはじめて地図の両サイドに手書きのテキストが付いていることを知った（付録1を参照されたい）。しかも、興味ぶかいことに、この第二の地図に描かれているのは実存する建物だけではなくだったのである。将来構想、つまり、建設予定の建物も描きこまれており、記号とそれに対する説明の両者がいないと、現存の建物と将来構想の建物かの区別がつかない。その意味で海軍文書館の地図より情報量が多い。各建物につけられた記号がそれぞれのどの建物をさしているかの説明も科学アカデミー所蔵の地図にはある。

ペトロパヴロフスク港の地図が『1819-1820年のイルクーツク県地図』に入っているのは、当時、カムチャッカ半島はイルクーツクにあるシベリア総督の行政地区に入っていたからである。科学アカデミー図書館蔵の地図帳には23枚の手書きの地図が収録されている。41センチ×63センチのサイズで、最後の23番目の地図がペトロパヴロフスク港の地図である。前述のように、この地図はまだ公刊されておらず、その重要性をかんがみて、ここでは地図を公刊するとともに、記号も含め、全文翻訳を本稿末に掲載する。

地図には、町の病院、郵便局、長官の事務所、将校用の建物、警察、市場、行進練習用の広場、練兵場などが描かれており、ペトロパヴロフスクが軍港として発展してきたことを物語っている。建設予定の船舶整備工場や造船所、砲台は軍港としてのさらなる発展を示唆している。また、ひととき大きな露米会社の建物は、ペトロパヴロフスク港にとっての露米会社の重要性を反映している。嘉兵衛も「この村でカンパンヤという者が、町中の頭で、村内を取り仕切っている」という証言を残している。嘉兵衛がカンパンヤと言っているのはкомпания（会社）、すなわち露米会社である。

嘉兵衛とリコルドが寝泊まりしていた長官の家は、地図の東北部に位置している。地図では二つの小川に挟まれた所にたっているが、そのうちのひとつは現在もグム（百貨店）と裁判所の間を流れている。長官の家は、ロシア連邦保安局カムチャッカ州委員会の建物と裁判所の間のソヴェツカヤ通りに近い所にあつたと思われる²⁴⁾。この長官の家を拠点に嘉兵衛は日露関係改善のための知略と知謀を繰り広げたのであつた。

4. カムチャッカの高田屋嘉兵衛

リコルドは嘉兵衛との約束を守り²⁵⁾、ディアナ号では艦長室で嘉兵衛と起居をともにし、カムチャッカでも長官の家で寝食を共にした。ある程度言葉ができるようになると、嘉兵

23) 『北海道新聞』1988年9月28日。

24) 長官の家があつたところを特定するに際しては、カムチャッカの地方郷土図書館の上級研究員であるイリーナ・ヴィテル氏の助言をあおいだ。

25) ロシアに行くに際し、高田屋嘉兵衛がリコルドに出した条件は、同居することだった。Мельницкий В. Указ. соч. С.168.

衛は日本が戦鬪行為ではなく海洋測量を行っていたにすぎない8人の者を生け捕りにした理由をリコルドに次のように説明した。すなわち、日本では、双方から使者をたて、「何月何日にどこで一戦したい」と申し合わせてから戦いを始める作法があるのに、フヴォストフはいきなり番人たちを縛りあげ倉庫を焼き払い、悪逆非道を尽くしたので、「魯西亜船打払令」が幕府から出された。この令により、国後に来航したロシア船が生け捕りにされたので、ロシア政府が幕府に政府の関与を否定する正式の釈明文を提出したら一件落着となるだろうと嘉兵衛は提言した²⁶⁾。

リコルドは嘉兵衛との話し合いをうけて、オホーツクに長官のペトロフスキーをたずね、嘉兵衛の提案について話し合った。この間40日ほど嘉兵衛はペトロパヴロフスクにとどまり、リコルドと離れて暮らした。その間に、ナポレオンとの戦争でロシアが大敗したことを聞き出し、ロシアは日本への応対どころではなくなり、帰国がおぼつかなくなるのではとの懸念を抱いた。

カムチャッカの生活は厳しいものだったが、嘉兵衛たちは自分の食い扶持は自分でまかっていた。従来の漂流民たちはロシアから補助金を得ていたのだが、嘉兵衛らが施しを受けず、自炊にこだわったのは、ロシアに対等にもものを言う立場を確保するためであろう。しかし、日本食ではカムチャッカの冬は乗り切れず、ビタミン不足から起こる壊血病で、3人の部下が命を落とした。それまで元気だった嘉兵衛も次第に衰弱し、脚には壊血病の症状が出ていた。残りの日本人の命も風前の灯だった。嘉兵衛は金蔵に気がふれたような行動をとるように命じた。一刻の猶予もないという雰囲気演出するためであった。

嘉兵衛は帰国できない場合は死ぬ覚悟だった。その場合にそなえ、切腹の方法を手下に教え、さらに、火薬を集めさせた。ロシア人の銃をかり、空砲をうち、火薬を抜きとったり、広東人やイギリス人から譲りうけたりで、3リットルほどの火薬を貯めこんだ。日本人の心意気を示したうえで、爆死するつもりだったのだ。

一方、リコルドは嘉兵衛の意見を取り入れて、イルクーツク知事から松前奉行に宛てた公式の釈明書を日本に持参できるよう、オホーツク長官に手筈を整えてもらい、日本に出発する前に釈明書を受け取りにオホーツクに立ち寄ることにしていた。

しかし、嘉兵衛はリコルドに次のように言った。このままでは生き残っている三人の命ももたず、和平交渉ができなくなるので、オホーツクには立ち寄らず、日本に直行し、命がけで話し合いの場を整えよう²⁷⁾。

嘉兵衛がこのようにいったのは健康上の理由からだけではなかった。嘉兵衛は、日本遠征にはカムチャッカの二艘の軍艦に、オホーツクの三艘を合わせ五艘で行くという情報を得ていた。五艘も来航されては、日本はロシアの五艘の軍艦の圧力に屈したといううわさが立ち「国恥」になる²⁸⁾と思ったのである。

26) Мельницкий В. Указ. С.168.

27) 『高田屋嘉兵衛遭厄自記』。

28) 同上。

リコルドはこれまでの経験から公式稟明書発行に関する願いが聞き遂げられるという確信が持てなかった。しかし、高田屋嘉兵衛が帰国できるか否かがロシア人捕虜の解放を左右することは確実だった。嘉兵衛が同行すれば、ロシア人捕虜の解放だけでなく、日本との通商関係を結べる可能性すらあった。彼は計画を変更し、オホーツクへは寄らずに直接日本へ行くことを嘉兵衛に約束した。

1813年4月にリコルドは、イルクーツク民政長官から、皇帝の裁可を得たカムチャッカ経営の新方針を、カムチャッカ長官として実施せよとの命令を受け取った。しかし、リコルドは海軍中尉ルダコフにカムチャッカ統治を一時委任し、5月、正式な許可を得ず、正式の文書も持たないまま嘉兵衛を伴い日本に向け出帆した。

5. コトバ

当時の史料に基づいて嘉兵衛とリコルドの考えや彼らの作戦、それに基づく行動を再現してきたが、イニシアティヴは嘉兵衛がとっていたことがわかる。リコルドがオホーツク長官の所に行ったのも、ロシアの公式稟明を文書で提出するというのも、オホーツク寄港を取り止めて、直接日本に出帆したのも、全て嘉兵衛の発案である。

嘉兵衛とリコルドの会話は最初かみ合わなかった。リコルドは日本の捕虜となったロシア人の安否を探ろうと必死だった。その結果7人は無事であることを確認したが、ゴロヴニンに関してはその名を口にしても嘉兵衛は無反応だった。ア弁（アクセントのないオをアと発音する）地域出身のリコルドの発音では彼の名前は近似的には「ガラヴニン」となる。日本語では彼はゴローニン、ゴロウィン、カワビン、カバリン、ガラヒンなどと呼ばれており²⁹⁾、誰のことを指しているのか、嘉兵衛が理解するまでに6日を要した。これが異文化コミュニケーションの本来の姿であると思う。それがカムチャッカでは嘉兵衛の異文化コミュニケーション力が伸び、「日露紛争を解決するにはロシアの責任者に公的な稟明書を出させる必要がある」などというテーマの会話が自由になったのである。

いかにして嘉兵衛はここまでのコミュニケーション力を身につけ、リコルドを自分の思うように動かせたのか。意思の疎通をどうして図ったのか。前述したように、従来はジェスチャーで会話したとか、二人だけの「言語」をつくって会話したと説明されてきた。具体的な形のあるものはジェスチャーで示せるが、抽象的な理念や考えがどうしてジェスチャーや二人だけの「言語」で伝達できるのか。もとより嘉兵衛とリコルドの個人的な語学力の検証は基本的にはできないが、その到達度を知るうえでの目安となる事例や状況証拠をあげることでコミュニケーション力を探ってみよう。

まず、嘉兵衛であるが、ゴロヴニンは彼のロシア語について「この尊敬すべき老人はロシア語を話せなかったので、通訳を介して日本語で我々と話をした」³⁰⁾と言っている。

29) たとえば、『通航一覽』の該当箇所を参照されたい。

30) Головин В. М. Записки флота капитана Головина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1815 годах. Ч. 2. СПб. 1816. С.174.日本語訳に際しては以下の翻訳を参考にした。ゴロヴニン著・井上満訳『日本幽囚記』中、岩波書店、1943年。V.M.ゴロヴニン著・齊藤智之訳『日本幽囚記』Ⅱ、2006年。

しかし、嘉兵衛自身はロシア語で自由にコミュニケーションができたようなことを随所で書いている。大黒屋光太夫と違ってロシア語辞典を書き残していないので判断しにくいですが、彼がさまざまな文書で書いたロシア語には、たとえば、以下のような単語がある。

ウラー（万歳）／オロスケ（ロシア）／マレンカ（小さきこと）

ヤッポン（日本）／ヤカリ（錨）／カンパンヤ（会社）

ここから判断すると、意味や発音をキャッチする力はかなり正確である。ただ、彼が作成したロシア語文が見つからないので単語を並べて文にまとめる統語力は判断できない。また、書きとめられた語彙が極端に少ないので、語彙力の判断も容易ではない。嘉兵衛側の言語能力を見るだけではコトバの秘密は明かせない。

リコルドの日本語能力はどうか。嘉兵衛はリコルドの日本語力について、こんなことを言っている。「お前さん（リコルド一生田）は日本語がかなり分かる。私は水夫（金蔵と平蔵一生田）に簡単な言葉でしゃべるので、言っていることが理解できると思う」³¹⁾。リコルドはすでに初対面の時の面談で嘉兵衛が「シンドフナモチ（船頭船持）、すなわち、数艘の船の船長で船主」³²⁾であることを聞き出していた。ちなみに、この時点では五郎次は日本側に収容されており、リコルドには通訳はいなかった。彼は嘉兵衛に会う前に五郎次から日本語の手ほどきを受けていた。しかも海軍士官学校出身である。世界中で活躍する海軍の軍人を養成するこの学校はカリキュラムに6言語の習得を義務付けることで有名だった。世界中を航海するには航海術だけでなく、語学力も要求されるのは当然であった。リコルドが習得したのは、すべてヨーロッパ語ではあるが、多言語習得の経験は日本語学習にも有効に作用したであろう。さらに、常に嘉兵衛と起居をともにした。語学学習にとり最高の環境を得たことでリコルドの日本語力は飛躍的に伸びたと思われる。

しかし、リコルドの日本語能力の進歩だけでは説明がつかない事実がある。嘉兵衛はリコルドがオホーツクに出張した約40日の間彼と離れて暮らしたことがある。その間も彼はナポレオン軍にロシア軍が大敗したことなど多くの情報を聞き出している。この事実は嘉兵衛の情報源がリコルドだけでなかったことを示している。

嘉兵衛はこの情報をどうして集めたのか。実は彼にはオリカというボーイがついていた。オリカというのはオホーツク出身の12歳の少年である。嘉兵衛の報告書に「彼ヲオリカを通辞にして」とあるように、少年は嘉兵衛の身の周りの世話をするだけでなく、日本語通訳も務めていた。嘉兵衛はこの少年に「日本語の詞を教へまた彼国の詞を習ひ廿日斗の内相應に談話も出来」³³⁾るようになったので、「外からより来り候書状を密に持出させ読せ」³⁴⁾たという。すなわち、嘉兵衛は20日ほどでロシア語を習得し、オリカに密かに持ち出させた書状を読ませたと言っているのである。筆者のロシア語学習および教授の経験からして、ロシア語はいくら語学の才能があっても20日で公文書の内容を聞いて分かるよ

31) Рикорд П.И. Указ. соч. С. 59.

32) Там же. С. 34.

33) 『高田屋嘉兵衛遭厄日記』。

34) 同上。

うになるとは思えない。また、12歳の少年が20日間の特訓でそれを日本語に翻訳できたと言うのも無理がある。しかし、嘉兵衛はロシア語テキストの内容を把握できている。ここには日本語とロシア語以外の要因があるように思える。これについては、ナポレオン戦争に関する情報を収集しようと、手紙を持ち出しオリカに読ませた際の状況が示唆を与えてくれる。すなわち、少年のことゆえ詳しくはわからないので「当地へ逗留いたし居候広東人」³⁵⁾に尋ねた所、同様の話でオーストリアもフランスに加担したことが判明した。この広東人は四人で、商船の通訳であるという³⁶⁾。

カムチャッカの中国人に関しては、2000年放映のNHKのテレビ番組「北海の勇者 高田屋嘉兵衛 菜の花の沖からオホーツクへ」で、嘉兵衛はドベリと中国人を介して会話をしていたということが放映された。典拠は『ドベリの手記』とあるだけで、それ以上の手掛かりは放映されなかった。2009年7月に筆者はカムチャッカの郷土図書館で当時の書籍、新聞・雑誌に嘉兵衛が取り上げられていないか調査したが、ドベリの書には嘉兵衛のことはでていなかった。また、当時は地元の新新聞・雑誌は創刊されていなかった。しかし、2009年9月、ペテルブルグでの調査で嘉兵衛に関連する記事を見つけることができた。それはドベリの「シベリア旅行記」で1815年から1816年にかけて12回連載でペテルブルグの雑誌『祖国の息子』に連載され、その第6回目の記事がほぼ嘉兵衛に捧げられていた³⁷⁾。この記事のことは日本でもロシアでもほとんど知られていない。その資料的重要性を考慮して、本稿末に翻訳を載せることにする。ただし長いので、紙数の関係もあり、本格的に嘉兵衛論が展開されるところから掲載する。また、ゴロヴニンの今ひとつの幽囚体験（喜望峰）に関する2頁にわたる長文の脚注やその他の注も割愛する。

ドベリは旅行記の中で次のようにいっている。「私の所にいた中国人の召使いは、さほど苦勞することもなく、高田屋嘉兵衛と日本の文字で互いに理解することができる」。さらにドベリは次のような脚注をつけている。「日本語は文字の点で中国語と酷似している。それ故日本人と中国人は文字で相互に理解しあうことができる。しかし発音は全く異なっているため、口頭で会話することはできない」³⁸⁾。

日本と中国は漢文・漢字を共有する漢文文化圏に属している。特に、江戸時代には漢文は知識人の間でほとんど国語同様に扱われ、公文書は漢文であった。清とロシアの間には1727年のキャプタ条約締結以来キャプタにおける内陸貿易が行われていたので、ロシア語ができる中国人は多かった。嘉兵衛は彼らと筆談することができたであろう。中国人を媒介にすることで嘉兵衛はかなりの人から直接・間接の情報を収集することができたに違いない。

35) 『高田屋嘉兵衛遭厄日記』。

36) 『高田屋嘉兵衛帰朝記』『高田屋嘉兵衛露国一件始末』いずれも函館図書館蔵。

37) Добель П. В. Отрывки из записок путешественника по Камчатке и Сибири // Сын отечества. 1815. Ч. 22. № 22. С. 83-95; № 25/26. С. 204-210; Ч. 25. № 45. С. 243-251; Ч. 26. № 47. С. 53-56 (под. загл.: О Петропавловском порте); № 48. С. 81-94; 1816. Ч. 27. № 1. С. 9-24; № 3. С. 98-107; № 4. С. 130-138; № 5. С. 178-199 № 6. С. 233-236; Ч. 29. № 14. С. 51-59; № 15. С. 81-92.

38) Добель П. И. (Пер. Г. К.) Записки путешественника по Сибири // Сын отечества. Ч. 27. № 1. 1816.. С. 13-15.

しかし、手紙を盗み見るといのは諜報活動であって、中国人に頼めない文書解説もあったのではないだろうか。なにしろ一人の中国人の主人はドベリで、領事、すなわち、ロシア政府側の人間である。嘉兵衛はどうこの難問を解決したのか。

今一人の人間の存在が『蝦夷物語』³⁹⁾に描かれている。この文書は淡路の篤学渡辺月石が嘉兵衛の弟の話を書きとめたものであり、生々しいことが書かれている。その中に嘉兵衛が帰国後、高貴の御前（阿波の殿様）に召され語った話という一節があり、次のような記述がある。

その女性がみずからが作詞した歌詞を嘉兵衛に見せた時のことである。その時の様子は次のようであった。「其唱歌は分らねども大に興に乗じ候ひし。偕此歌は妾が作りし文句也と、紙上に認め見せけれ共、是又繩をたぐりたる如き文字にて読事能はざれば、逗留中久しく逢なれて自然に日本の詞に馴ければ、和解して申ける」⁴⁰⁾。

ちなみに「和解（わけ）」とは和訳のことである。この引用から分かることは彼女の日本語能力だけではない。女性が歌を歌った後に、歌詞が分からない嘉兵衛のために、それを紙に書いて見せたことに注目したい。このことは文字にすれば嘉兵衛が理解できる可能性が高くなること、すなわち、彼の日頃のコミュニケーション手段が文字言語であったことを示唆している。日本語もしゃべるこの女性は何者なのか。

嘉兵衛の弟はなりそめを次のように語っている。「其処の掌司と覚しき処に至り是に見るに、傍に侍る一人色白く有才の体に見へける故、仕方を以我客舎に接伴せしめん事を乞ふ。早速許容故則同伴して客舎に帰り、滞留中常に仕方にて対話し、漸互に徴く通解する事を得たり」⁴¹⁾。

嘉兵衛の見込み通り、彼女は才能ある女性で、給仕をはじめ嘉兵衛の身の周りの世話をした。それだけではなく、嘉兵衛とは男女の間柄でもあったようで、『蝦夷物語』は以下のように述べている。「別れに臨み、私にひしとまとひ付、口を吸、不思議の縁でをち人にあひなれ参らせ、今別るゝ事の本意なさよと、殊におなかもたゞならぬ身と成侍りぬ。我をもつれて帰り給へと、纜に取付すがりていたく歎し有様は、俊寛が面影に思ひくらべていぢらしかりき。されど心よはくは叶はじと余処に見捨て帰り候ひし」⁴²⁾。

その女性のお腹には嘉兵衛の子供がいたようである。その子供が生まれたのかどうか今となっては判らないが、嘉兵衛には心を許せる現地女性がいたようである。

いずれにせよ、嘉兵衛には文献的に確認できるだけでも6-7人の通訳協力者がいたようである。嘉兵衛の情報収集源はリコルドだけではなかったのだ。

当初、嘉兵衛の前には、コトバの壁が立ちほだかっていた。それがカムチャッカに来て、ロシア語が話せると実感するようになったのは、話の内容が分かるようになったからであ

39) 『蝦夷物語』1826年、大阪府立図書館蔵。引用に際しては、読みやすいように、句読点を補った。なお、以下のものに翻刻が掲載されている。渡辺月石『淡路 堅盤草 付蝦夷物語』下巻、臨川書店、2003年、505-564頁。

40) 前掲『淡路 堅盤草 付蝦夷物語』561頁。

41) 同上、521頁。

42) 同上、561-562頁。

ろう。そこには漢字が介在していたのではないだろうか。表音文字と違って表意文字である漢字は、発音ができなくても、多くの意味を伝える。

リコルドとの対話は同じ目的を追求することから、ある程度、文法無視の構文でも、少ない語彙力でも、会話の目的は達成されたかもしれない。しかしその他大勢の人との話題を限定しない会話は漢字を介していたと見るのが妥当だろう。そうでないと、彼のロシア語能力と収集した情報の質と量との関係が説明できない。

6. 儀礼・象徴

嘉兵衛は捕虜としてではなく、日本とロシアの紛争を回避するためにロシアに渡った。彼が自らに課した任務は外交官の役目である。外交官は新しい任地でまずは人間関係を構築し、その上にたって対話をしなければならないという⁴³⁾。嘉兵衛はどうしてそれを成し遂げることができたのか。

嘉兵衛外交が成功したのは、まずリコルドとの間に信頼関係を打ち立てたことが大きい。リコルドは初対面の際の嘉兵衛について以下のように書いている。「彼の立派な絹服と太刀、その他の点からみてこれは相当の人物であることが判った」⁴⁴⁾。実は嘉兵衛は捕らえられ、単身、観世丸からディアナ号に乗り移る時、ロシア兵を待たせ紋付袴に着かえ、帯刀したのである。絹服や太刀のもつ記号的意味を十分知りつくしていたといえる。

嘉兵衛はロシアに連行されるのを承知する時、リコルドに条件を出した。それは前述したように、2人はいつも一緒にいるということだった。この約束を守ってリコルドはディアナ号では船室を共にしたし、ペトロパヴロフスクでは長官の家でも部屋を共有した。これは相手を観察し、理解するのに最良の方法である。また、言語の学習にとっても最高の環境となる。

嘉兵衛はリコルドの気持ちをつかむ努力をした。たとえば、リコルドがオホーツクへ出発する時の別れの演出である。嘉兵衛はオホーツク長官ペトロフスキーに自分のことを良く言わせようと、出発間際に、タバコのヤニを目に塗り、涙を流してみせた。効果は絶大で、リコルドはおおいに感激し、出発していった⁴⁵⁾。

嘉兵衛はロシアの儀礼も習得し、リコルドがペトロパヴロフスクへ帰ってきた際には、出迎への挨拶として、口づけをおこない、無事の挨拶をし、落涙してみせた⁴⁶⁾。大黒屋光太夫もロシアのノンバーバルコミュニケーション手段を多用したが、わずかの滞在で嘉兵衛もそれを取得している。嘉兵衛は、彼国の礼は「三度口を吸ひ」と述べ、ロシア文化における接吻の機能を看破している。明治以前の日本文化には「接吻」という語彙がなく、日本語の「口吸い」はもっぱら性愛行為しか表現⁴⁷⁾しなかったことを考慮すればその洞

43) 矢田部厚彦『職業としての外交官』文芸春秋、2002年、136頁。

44) Рикорд П.И. Указ. соч. С. 34.

45) 『高田屋嘉兵衛遭厄日記』。

46) 同上。

47) 接吻の白露比較については拙著『大黒屋光太夫の接吻 異文化コミュニケーションと接吻』（平凡社、1997年）を参照されたい。

察力には舌をまく。

嘉兵衛の願いを聞き入れたリコルドがオホーツクへは寄港しないで、直接日本へ向かう決意を伝えた時にも嘉兵衛は儀礼を用いて応答している。嘉兵衛は生き残った2人の水夫をよび、この知らせを伝え、リコルドにこの場を離れてくれと頼み、服を改めた。リコルドはこの時の様子を次のように書いている。「嘉兵衛は帯剣し正装に身をただし、二人の水夫を従え自室を出て私に謝辞を述べた。意外の感にうたれ、この善良な日本人の感情に感激した私は、自分の約束はかならず果たすと断言してやった」⁴⁸⁾。嘉兵衛が正装に身をただし謝辞を述べたことで、リコルドと嘉兵衛の間の約束が正式なものにランクアップしたのであろう。威儀を正した彼の正装姿を見てリコルドも襟を正し、前言を翻さないことを確約したのであった。

嘉兵衛はオホーツク長官ペトロフスキーをも人的ネットワークに組み入れている。ペトロフスキーはペトロバヴロフスクに來た時、16歳になる娘を連れて嘉兵衛の所に挨拶に來た。ペトロフスキーの目的は嘉兵衛たちは無事で暮らしているのだから、來航した時に発砲しないでほしいという手紙を嘉兵衛に執筆依頼することだった。嘉兵衛は彼の依頼に対し、拉致してこられたうえに、三人が死んでいるのでそのような手紙は書けないと峻拒した。その一方で嘉兵衛はペトロフスキーが帰宅する時に、ガラスの徳利に日本酒を入れ、飯びつに2升の米を入れ、贈呈している。

このような儀礼・象徴による意思伝達はドベリに対しても行っている。ドベリと嘉兵衛は親しい間柄で、通商や国の仕組みのことなど、様々なことを話し合った。これについては論文末の付録を参照いただきたい。ここでは、儀礼・象徴に関係する部分のみ紹介する。

早朝に、嘉兵衛は日本人全員を引き連れて私の所にやってきた。手下に赤い絹布でおおった大きなクッションを持たせ、その上には日本刀があった。彼は両手で刀を頭上に持ち上げると、下におろし、頭を床にすりつけんばかりにした。9回拝礼すると、クッションの上にある刀を机の上におき、尊敬する皇帝陛下に献上してほしいと拝謁しに都に赴くドベリに依頼した。

ロシア皇帝に愛刀を献上するにふさわしく、威儀を正した嘉兵衛は、儀礼と象徴でドベリに働きかけ、彼を介して、皇帝アレクサドル一世にまで働きかけようとしたのである。『蝦夷物語』には嘉兵衛が皇帝に直訴しようとしたという一文がある。嘉兵衛は、大黒屋光太夫のように、皇帝に直接談判することも視野にいれていたようである。だが、若くもなく、健康上の不安もあったことからシベリア大陸横断は断念し、ドベリを通じて働きかけることにしたのである。嘉兵衛はドベリに嘉兵衛からの献上品だと申し添えるのを忘れないよう念を押している。ドベリは約束を守り、嘉兵衛の愛刀を皇帝に献上し、皇帝は3等侍従長官トルストイ伯に命じてその刀をエルミタージュに納めさせた⁴⁹⁾。

嘉兵衛が働きかけたのは上層部だけではない。彼は日本の年始にあたる1月18日（和暦1

48) Рикорд. П.И. Указ. соч. С. 34.

49) Добель П.И. Указ. соч. С. 19.

月3日)、ルダコフ(ディアナ号の航海長)にロシア語で招待状を書いてもらい、日本酒3樽とその他の蓄えておいた食材を用いて日本の食事に地元の男女を招待した。ロシアの踊りも披露し、「大盛宴」を一日中行った。それまでは日本人は「小恵なる者」と思われていたが、この宴会で酒をたくさん振る舞ったので、「小恵の国」とは思えないという評判がたった。その後は道で会っても丁寧に挨拶するなど、親しい者もでき、言葉もわかりやすくなり、退屈もせずに暮らすことができた⁵⁰⁾という。

土地で良好な人間関係を築き、受け入れられないと重要な政策を推進することはできない。こうした人的ネットワーク構築に際し重要な意味をもつのが「もてなし」である。従来の漂流民や捕虜たちは命からがらカムチャッカに来たので、食客の身に甘んじるほかなく、もてなそうにも物資の余裕がなかった。土地の間では日本人は「けちな人間」という評判がたっていた。前述したように、嘉兵衛は食事の施しを受けず、自炊した。他国で生き抜くにはその土地の食べ物を食さないといけないことは嘉兵衛にも分かっていたであろう。しかし、日本の代理人としての自負を持つ身では食客に甘んじていては、交渉の際の対等性が維持できなかった。自炊生活を可能にしたのは、米、味噌、醤油、その他の物資を観世丸から持って来たからであった。自炊と豪勢なパーティにより嘉兵衛はカムチャッカの人の心をつかむことができた。

こうして上から下まで張り巡らされた人的ネットワークが嘉兵衛の対露対策の実行を下支えしたと思われる。

終わりに

フヴォストフ・ダヴィドフによる蝦夷地襲撃事件、ゴロヴニン捕縛事件、高田屋嘉兵衛拿捕事件と19世紀初頭の日露関係は極度に陰悪な状態となった。ロシアに拉致された高田屋嘉兵衛はロシア語を知らなかったため、カムチャッカで交渉できることはそう多くないはずであった。しかも、日本から派遣された使節ではなく、抑留者であったため、その活動は漂流民と大差ないものになる可能性があった。

しかし、嘉兵衛はこのロシア抑留生活を日露交渉の千載一遇のチャンスに変え、巧みな外交交渉を展開した。コトバの壁を筆談や通訳を駆使することで乗り越え、儀礼・象徴の助けを借りて自らが欲するところを伝えることができた。食料を自給したことで従属関係に陥ることなく、矜持を保ち、ロシアに堂々と要求することができた。拉致被害者の身でありながら嘉兵衛が対等性を保ちつつロシアに対峙したことはロシアの対日政策に影響を及ぼさないわけにはいかなかったと考えられる。

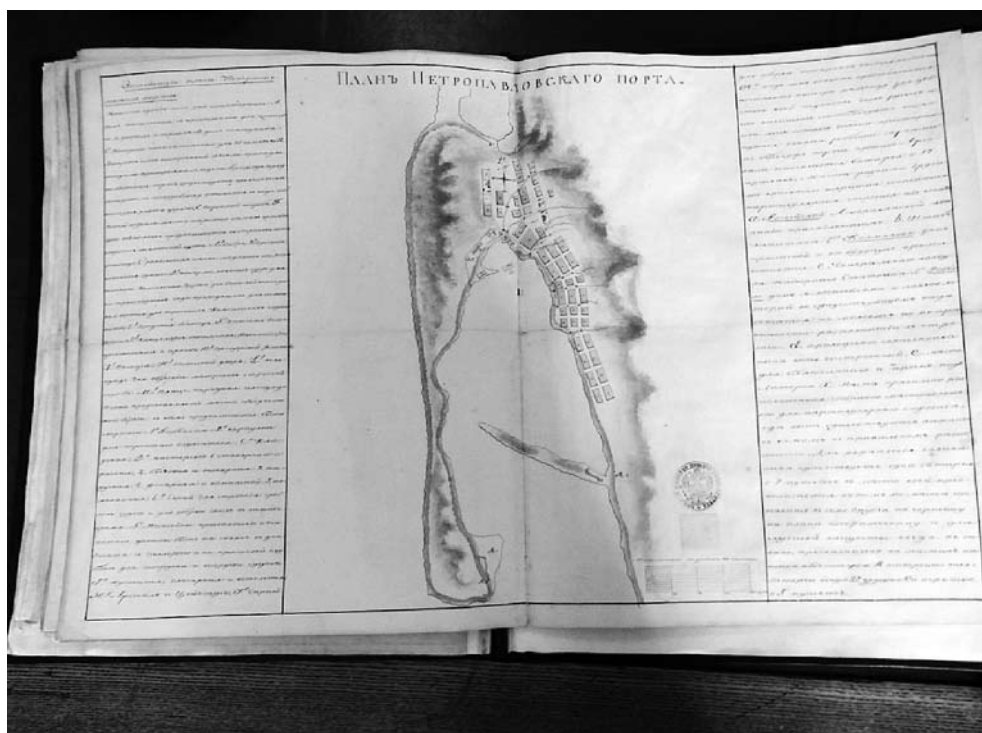
コトバと儀礼・象徴による人的ネットワークの構築と対等性の追求は日露関係改善の重要な前提をなしたといえる。

史料調査に関しては、北方歴史資料館館長の高田嘉七、高田本家の高田耕作、高田屋嘉
50) 『高田屋嘉兵衛遭厄日記』。

兵衛翁顕彰会の琴井谷惠民，北山学，斉藤智之，函館の称名寺住職の須藤隆仙，函館市立中央図書館の奥野進，徳島県立文書館の金原祐樹，カムチャッカ郷土図書館のイリーナ・ヴィテル，ロシア海軍文書館の副館長のマリーナ・マレヴィツカヤ，ロシア歴史史料館の艦長のアレクサンドル・ソコロフの各氏に便宜を図っていただいた。また，リュドミーラ・エルマコワ，アレクサンドル・ディボフスキー，ユリア・ミハイロバの各氏には翻訳の際にご教示いただいた。記して感謝する。なお，紙数の関係で参考文献は省略せざるを得なかった。引用に際し，旧漢字や平仮名の一部は，当用漢字に直し，適宜句読点を補った。

付録1 ペテロパヴロフスク港の地図（1819—1820年）

現在すでに存在している官舎には次のものがある。Aは長官の家で，召使用の別棟と中庭，納屋がある。Bは長官補佐の家である。Cは兵舎で現在60人用建物の起工が行われた。Dは新しく建設された病院で，あらゆる付属施設が備わっている。さらに港湾建設が予定されている海岸通りには食料品店もある。しかし，不便なので，教会同様に，現在のままの形では将来的には存続しないであろう。Eは弾薬庫，Fはワインの地下倉庫で，淡黄色に塗られた部分がそれである。そこには新しい建物が官費で建設される予定である。A!は寺院，B!は神学校，C!は職業訓練学校で，官費で建設されつつある。D!は兵舎でそのうちのひとつは，カムチャッカの船員用で，二つ目は越冬するため当地に送り込ま



れてきたオホーツクの船員チーム用で、三つ目はカムチャッカの港湾労働者のためである。E!は町の病院、F!は郵便局、G!は長官の事務所、会計課、糧食課と記録課が入っている。H!は将校のための建物、J!⁵¹⁾は警察、K!は商業ヤード、L!は水兵の隊列教練用広場、M!は練兵場である。港は、湾岸線にそってある。そこには以下のものが建設予定である。A”は営倉、B”は港湾労働者の番所、C”は倉庫、D”は修理工場で以下のものがある。1は木工と製材、2は滑車と旋盤、3は帆、4は灯火と羅針盤、5は索具である。E”は漕船の造船と冬季に漕船を清掃するための場所である。F”は二階建てで回廊つきの船員用食料品店が（海上の）杭の上に見える予定で、奥では船の積み下ろしができるようになるはずである。G”は鍛冶、組立、ボイラー、H”は武器庫、J”は消火器の収納庫である。K”の記号がある所には、製材機が設置される予定で、二つの川を合流させ水位をあげてそれを運転する。湾に突き出ている砂州コーシカには魚の倉庫ができています。武器庫の対岸には17門の大砲をもつ砲台の建設が予定されている。その他のさまざまな色を塗った場所には私的な建物の建設が予定されている。そのうちaは露米会社のもので、bはコルマコフ二等大尉の司令部で建物が素晴らしいので、将来も残るであろう。cは総領事で7等文官のドベロ⁵²⁾の家で、建物には商店や売店が入っているが、不便な所にあるので、現在の形では将来残らないであろう。dは教区専属司祭の家で現在新しく建築された。eは高官用の建物の建築予定地で、文字xで示されている場所には、将来私的な建物が建設されるが、現在は掘立小屋が建てばらばらにたっている。湾の防備強化のため現在7門の大砲をそなえた砲台がある。将来計画によると入港防備強化のため文字kのついた場所に22門の大砲を備えた砲台1台、10門の大砲を備えた砲台1台、5門の大砲を備えた砲台が1台建設されるはずである。

付録2

「シベリア旅行記」(抄訳)

ピョートル・ドベリ著・生田美智子訳

ペトロパヴロフスク港に滞在中、私は日本の官吏である高田屋嘉兵衛と知り合いになった。彼は日本で捕虜になって投獄されているゴロヴニン艦長を救出するための最良の仲介役としてリコルド艦長によりフリゲート艦ディアナ号で当地に連行されてきたのだった。私の所にいた中国人の召使は、さほど苦勞することもなく、高田屋嘉兵衛と日本の文字で会話することができた。彼は英語も知っていて上手に話せた。この中国人を介して自分の考えを日本人に伝えるのは具合がよかった。嘉兵衛はきわめて呑み込みが早く、さ

51) 地図上にI!の記号はない。

52) ドベロはドベリと表記されることが多いが、ここでは地図の表記のままとする。

さまざまな事柄について自分からも考えと感情を表明した。カムチャッカにいる同じような境遇の中国人よりはるかに多くの知識と学識を私に示した。このことから、前述したように、日本人は中国人より賢くて学識があると私は結論するにいたった。彼は熱心に自分の知識を増やそうとした。彼の祖国ではほとんど知られていないヨーロッパの習慣、政治、宗教、生活様式やその他について常に理にかなった質問をした。地図上で地球上の六分の一以上の面積を占めるロシア帝国を示して我々は彼を驚かせた。この帝国を統治しているのは一人の皇帝であり、特別の警護をつけず一人で民衆の間を歩けるくらい自分の民衆に愛されていると話す、彼はさらに驚いた。皇帝自身が軍隊を統率し、多くのスラヴ民族がロシアに侵入したフランスに勝利するため目下実際に戦場にいる!!!と聞くと、彼はますます驚いた。嘉兵衛は言った。「ロシアが占めている空間と比較すると日本は小国だが、人口が多い。日本には皇帝が二人いる。二人の皇帝がいなくてどうして国を治めることができるのか分からない。一人は精神界の皇帝で、もう一人は世俗界の皇帝である」。嘉兵衛にヨーロッパにおける聖職者の説明を少しすると、われわれのシステムを理解したようであったが、彼は次のように言った。「驚きだ。皇帝権力がカムチャッカのような遠隔地でこのようにきちんと統治しているとは」。彼はカムチャッカ半島の状態をほめそやした。そして、クリル諸島は日露の交流のために自然が作った橋に似ていると言い、両国に莫大な利益をもたらす東ロシアとの自由な交流に日本人が従事するのを政府の古くからの政策が妨げているのをとても残念がった。嘉兵衛はフィリピンとマレー諸島の多くの産物を知っていた。それらは日本がきわめて必要としているもので、カムチャッカを日本への中継点とすると日本の手工業品と交換に産物を運びこむのが便利になる。私と様々な事柄について話をすると、彼は常に感動し、日本の皇帝とはきわめて異なるロシアの皇帝に対するうやうやしい尊敬の念を示した。ある時、驚いたことに、朝食直後の早朝に、高田屋嘉兵衛は日本人の身内全員を引き連れて私の所にやってきた。彼を出迎えるために席を立とうとした。しかし、彼は、私に座ったままにいるよう強い調子で合図した。一緒にいた日本人の一人から、赤い絹の布をかけた大きなクッションを受けとった。その上には日本刀があった。彼は両手で刀を頭上に持ち上げると、下におろし、頭を床にすりつけんばかりにした。この儀式を9回繰り返すと、クッションの上にある刀を机の上におき、挨拶の言葉を述べた。当方の中国人はそれを次のように説明した。すなわち、リコルド艦長および私（ドベリのこと一生田）と何度も話をするうちに、嘉兵衛は、ロシアの皇帝陛下の徳を高く評価し、心服するようになった。私がサンクトペテルブルグに上京し、皇帝陛下に拝謁すると聞いたので、尊敬と感服のしるしに自分の愛刀を私に託したのである。その際、彼は皇帝陛下に捧げるにふさわしい儀式をおこない、かかる広大な国家をいとも簡単に治めている剛毅な君主のみに対して払う尊敬の念を示したというわけだ。

折りを見て艦長リコルドの友情ある寛大な行動に対しても捧げものをするつもりであると私（ドベリ一生田）に言うよう彼は中国人に頼んだ。なぜなら、嘉兵衛は捕虜であるが、

武器やその他の物を身につけ、自由に使用してよかったからである。それに対し彼はとても感謝していた。彼はロシア人から受けたホスピタリティと厚遇を決して忘れないであろう。この人物が、遅かれ早かれ、二大強国の間を仲介して交流をはじめさせることを望む。嘉兵衛は極めて強くそれを望んでおり、洞察力と卓見をまじえ両国がそれにより得る利益を示し、常にこのことを話題にした。

実際、それらの多くが利益をもたらすことは目に見えていた。日本やフィリピン諸島ほど交易を開くことでシベリアやカムチャッカに幸福な暮らしをもたらす所はないであろう。それらの国々とロシアはもうかる商売をすることができる。海、順風の季節風および、その他の天然の手段は、あらゆる形の交流に対する両列強の使命を驚くほど示している。カムチャッカと日本にとってのフィリピン諸島の重要性は、英国やヨーロッパにとっての東インド諸島のように、きわめて大きい。土地が肥沃であること、様々な有益物質や贅沢品があることを考慮にいと、東インド諸島以上である。しかし、今は話を日本の役人に戻そう。彼は50歳くらいで、中背で、情熱的な性格だった。はっきりした顔立ちだが、きわめて日本的である。ひと目で、太っ腹な性格であることが分かる。彼が意気消沈していることはめったになかった。不幸を勇気でもって克服する哲学の教えにしたがっているようであった。人に対し影響力を持ち、敵対的な状況も和やかにした。彼はしばしば日本人の生活習慣や儀式に関する面白い話をして、われわれを楽しませてくれた。しかも、判断は極めて鋭かった。彼は奇妙なことを笑い、不作法だと思ふことを非難した。ある時、彼はわれわれに刀を使う練習を見せてくれた。それは両手を使いきわめて迅速に行うものだった。しかし、彼は日本のフェンシングはわれわれのものよりはるかに劣るものだと認めた。嘉兵衛はロシアの兵卒と砲兵の教練を見ると、日本の軍事力のことを笑い、馬鹿にした。彼が言うには、ヨーロッパの軍事力と比べると、日本のそれは子供のレベルである。ここで再びこの日本人に敬意を表さないわけにはいられない。私は、このような告白をすることのできる精神的に寛大な中国人に会ったことは一度もない。ところで、中国人は勇気、芸術、その他あらゆる点でも日本人よりはるかに劣る。砲兵は、ことに嘉兵衛の注目をひいた。コルマコフ陸軍中尉、この砲兵司令官を正当に評価しなければならない。完全な秩序のある砲兵隊がカムチャッカにあるのは彼のおかげで、このことにより彼には至る所で名誉がもたらされるであろう。

アジアの諸国にいた時に私が集めた全ての情報から判断すると、日本の軍事力は、人数は多いが、ほとんど機能しておらず、国を防衛する力があるようには思えない。実際、あらゆる港、湾、町は十分な数の大砲をそなえ防備されているが、そのほとんどは貧弱で、突貫工事で建造されたものである。その多くは布でそれらしく見せかけた砦柵にすぎない。それゆえ、爆弾ひとつでひとたまりもないであろう。軍事的な欠陥があるので、日本人は勇気と豪胆を備えているが、彼らは攻撃者の犠牲になるであろう。彼らを征服するにはかなりの兵力がいる。というのは、彼らは人数が多いから。しかし小規模な遠征隊を派遣す

れば、隣国諸国と友好的な貢納関係に入らせることができるであろう。高田屋嘉兵衛に見られるように、日本人は、率直さと洞察力の点で優れているので、科学や芸術の分野でいつまでもヨーロッパの後塵を拝することはないであろう。彼らの理性をとらえている古い習慣への偏見をなくし、日本人を、中国人のように、力づくで変えさせることはできる。高田屋嘉兵衛は、日本が攻撃される際の危険性を完全に予知したようで、日本人にとっての多くの重要な利害について述べた。彼はきわめて善良な心を持ち、偽ることなく、友情と憎しみを示した（他のアジア人と極めて異なっている）。彼の私に対する心服は心からのものであり、同様に彼が述べた考えも偽りのないものであると信じている。ロシアとの交易を開くという考えは嘉兵衛の1番のお気に入りのもので、彼は両強国にとり重要なことか何ということを決えず話している。私がカムチャッカを出発するにあたり、彼は別れを惜しみ、私に永遠の友情を約束した。嘉兵衛は悲しみを表明し、高齢で健康状態も良くないので、私と一緒にサンクトペテルブルグに行くことはできないが、彼の名前で皇帝陛下に刀を贈呈することを忘れないように頼んだ。